

v.

- 12) M. M. Reese, *The Cease of Majesty*, (London, 1961), p. 33.
- 13) *ibid.*, p. 34
- 14) Augustine, V, 19.
- 15) J. L. Simmons, *Shakespeare's Pagan World* (University Press of Virginia, 1973), p. 26.

た。けれども英国の武将はローマ的名誉観に駆られながらも、なおキリスト教の制約を免れることができなかった。

これに対しローマの武将はアリストテレス的矜持に基づく特有の名誉観を行動原理とし、キリスト教の教義とは全く無縁の世界にあって、専ら個人的な軍事的榮譽の追求に専念したのである。言い換えるなら、ローマにおいて名誉は対人的な横の関係を持つにすぎなかったが、中世英国ではこれに加え、絶対的存在である神との縦の関係が隠然と存在したのである。シェイクスピアのローマ史劇を成立させているものは、何よりも劇の根底にある、ローマ世界に対するこの明確な認識であったと行うことができる。

注

- 1) Maurice Charney, *Shakespeare's Roman plays* (Harvard University Press, 1961), p. 207 参照。
- 2) 本論における Shakespeare の引用は *The Works of William Shakespeare*, Globe Library, ed. William George Clarke & William Aldis Wright (London, 1961) に拠る。
- 3) Aristotle, *The Nicomachean Ethics*, tr. H. Rackham, Loeb Classical Library (London, 1968), IV, iii.
- 4) Robert Ashley, *Of Honour*, ed. Virgil B. Heltzel (San Marino, 1947), p. 34.
- 5) Ruth Kelso, *The Doctrine of the English Gentleman in the Sixteenth Century* (Gloucester, 1964), p. 97.
- 6) Plato, *The Republic*, tr. Paul Shorey, Loeb Classical Library (London, 1963), IV, xiv.
- 7) *ibid.*, IX, vii.
- 8) Aristotle, IV, iii.
- 9) Curtis B. watson, *Shakespeare and the Renaissance Concept of Honor* (Westport, 1976), p. 110.
- 10) Augustine, *The City of God*, tr. Henry Bettenson, Pelican Classics (1976), V, 14.
- 11) E. M. W. Tillyard, *The Elizabethan World Picture* (London, 1956), p.

ては中世英国で社会的存在とはなりえなかった、という事実も見落とされてはならない。リチャード三世は、ヘンリー五世とはおよそ対蹠点立つ悪魔的存在である。劇の冒頭で「悪党になる決心をした、I am determined to prove a villain」(*Richard III*, I. i. 20) 彼は、エドワード四世から王位を篡奪し、その王位の保持のためには、「いまだわが国で犯されたこともないような、／この上もなく哀れな惨殺、The most arch of piteous massacre / That ever yet this land was guilty of.」(IV. iii. 2-3) と語られる幼い王子たちの殺害も平然とやってのける。ところがその彼ですら、おのが悪心をかくすのに聖書の言葉をひけらかし、民衆の支持を得て王位につくためには敬虔な信仰を装わざるをえなかった。

May. See, where he stands between two clergymen!

Buck. Two props of virtue for a Christian prince,

To stay him from the fall of vanity:

And, see, a book of prayer in his hand,

True ornaments to know a holy man. (III. vii. 95-9)

市長　ごらんなさい、あの方が二人の聖職者をつれてお出しました。

バッキンガム　クリスチャンの王族が軽薄の罪に陥らぬよう、

徳を支えておられる二本の柱だ。

それにどうだ、祈禱書を手にしておられるではないか、

あれこそ有徳の人を見分ける真の証だ。

篤信の陰にかくされた希代の老獺さを思えば、これはまさに茶番劇にひとしい光景ではある。

8

すでに見てきたように古代ローマに劣らず中世英国においても、ローマ的名誉観は意識的あるいは無意識的に武将や貴族たちの行動を支配してい

この倒れた柱から、艦隊を
沈めるほどの重荷をお慈悲をもって取り除いて下さったのだ、
あり余る名誉という重荷を。
ああ、クロムウェル、名誉は
重荷だ、天国にあこがれる人間には重すぎる荷物なのだ。

グリフィスの語る彼の最期の模様は、神に払う畏敬の念そのものがこの世では得られない名誉であることを物語っている：

His overthrow heap'd happiness upon him;
For then, and not till then, he felt himself,
And found the blessedness of being little:
And, to add greater honours to his age
Than man could give him, he died fearing God. (IV. ii.64-8)

失脚もあの方には豊かな祝福となりました。
その時、その時はじめて真の自分に出会い、
取るに足りない存在であることの幸いを知りました。
晩年にはこの世が与える以上の大きな名誉を得て、
すなわち神を恐れつつ死んでいったのですから。

ウルジーの得た浄福は、名誉が現世的な意味しか持たなかった古代ローマ人には、理解を越えるものであった。

宇宙的秩序の観念が支配する中世英国ではあるが、武将たちがいずれもヘンリー五世のような深い信仰を抱いていたのではない。彼らとてローマの武将同様個人的功績を誇示し、名誉や栄達を望んだのである。いや、ホットスパーの場合に見たように、名誉こそ大方の武将たちの最大の関心事であったと言える。一握りの信仰深い人人を除いては、教会に出席する聖日と世俗生活に明け暮れる平日とが、建て前と本音の処世術によって巧みに使い分けられていたのが実態である。

同時に、たとえ反キリスト教的立場に立つにせよ、キリスト教を無視し

英国の武将との決定的な相違を思い知らせる。

アウグスティヌスは「真の敬虔なしには、すなわち真の神に対する真の崇拝なしにはなんびとも真の徳を持つことはできない」¹⁴⁾と明言し、また「人間の栄光に奉仕する徳は、真の徳ではない」¹⁴⁾と断言する。「真の神に対する真の礼拝」を持つ者としてまず思い浮かべられるのはヘンリー五世である。しかしローマ史劇にそのような人物は見いだされない。コリオレイナスばかりか、ジュリアス・シーザー、マーカス・ブルータス、マーク・アントニー、オクティヴィアス・シーザー等ローマの武将が「真の敬虔」の片鱗すら見せることはなかった。彼らに「人間の栄光に奉仕する徳」はあっても、神の栄光に奉仕する徳は無縁のものであった。J. L. シモンズの指摘するように、「ローマ人にとって徳は全く市民的なもので、人間の主たる道徳的關係は監視する良心にではなく、監視する大衆と結ばれている。」¹⁵⁾

7

ところで宇宙論的体系における名誉とは、究極的に何を意味したのであろうか。ヘンリー八世の庇護のもとに絶大な権勢をふるった枢機卿ウルジーの晩年は、このことについて示唆してくれる。出世のはしごを登りつめた彼も、王の愛顧を失う時奈落の底へと転落する。だがすべてを失って初めて彼は真のおのれに目覚め、神の許へ立ち返るのである：

I humbly thank his grace; and from these shoulders,
These ruin'd pillars, out of pity, taken
A load would sink a navy, too much honour:
O, 'tis a burden, Cromwell, 'tis a burden
Too heavy for a man that hopes for heaven! (*Henry VIII*, III. ii.
381-5)

おれはうやうやしく王にお礼申し上げる。この両肩から、

リチャード二世殺害の罪をご容赦下さい。
 この度私はリチャード二世のご遺体を改葬し、
 無理に流された王の血潮以上に、
 あふれる悔恨の涙をなきがらの上にそそぎました。

恐れを知らぬ戦場の勇者も、なお身を正してその許しを乞うべき存在があることを知っている。

ではローマでは統治者の殺害はどのように受け止められたのか。唯一絶対の神を持たず多神教を奉じたローマでは、為政者に対しても同僚意識が強く、その殺害に神聖な秩序を侵害するという意識はなかった。ローマ世界で最も公正・正義の誉れ高いブルータスが師と仰ぐジュリアス・シーザーを倒した時、露ほどの罪悪感を示すこともない：「なあに、命を20年縮めてやる者は／死を恐れて暮らす年月をそれだけ縮めてやることになるのさ、Why, he that cuts off twenty years of life / Cuts off so many years of fearing death.」（*Julius Caesar*, III. I. 101-2）とうそぶくキャシアスにブルータスも和して言う：

Grant that, and then is death a benefit:
 So are we Caesar's friends, that have abridged
 His time of fearing death. (III. I. 103-5)

それなら死も恵みというわけだな。
 それで吾々はシーザーの親友なのだ、彼が死を恐れる歳月を
 縮めてやったのだから。

また彼らの自尊心は神の前におのれの非を認め、許しを乞うことを潔しとしない。護民官との和解をすすめて、「さっきの言葉は大変すまたかったと言うのだ、Repent what you have spoke.」（III. ii. 37）とメニーニアスが忠告する時、コリオレイナスは断固としてその申し出を拒絶する、「やつらに！そんなことは神にだって言えない、For them! I cannot do it to the gods;」（III. ii. 38）。はしなくも彼の口から漏れた言葉は、中世

住みつき、わが祖国はゴルゴタの野
すなわちされこうべの場と呼ばれましょう。

王位の篡奪は、国土の荒廃をもたらすばかりではない。その罪の意識が時に篡奪者の心中にも深い傷跡を残す。唯一絶対の神はまた、彼らの心中において不正を糾弾する絶対的審判者でもある。この篡奪の罪の意識が『ヘンリー四世』と『ヘンリー五世』を貫く共通の主題となっている。罪悪感と王位を維持する心労に心休まる暇もなかったヘンリー四世は、死期が迫る時おのれの非道に対する神の許しを乞うと共に、やがて王位を継ぐわが子の治世の平安を祈らずにはおれない：

How I came by the crown, O God forgive;
And grant it may with thee in true peace live! (2 *Henry IV*, IV. v.
219–20)

おお神よ、私がこの王位を手に入れたいきさつは許したまえ、
お前の世が、どうか安泰でありますように。

父王の苦悶はヘンリー五世にも引き継がれる。アジンコートの決戦を前にして、ヘンリーの心には不安がよぎる。かつて父王が犯した篡奪の記憶がよみがえり、それについての自分の懺悔も十分でないことを恐れる：

Not to-day, O Lord,
O, not to-day, think not upon the fault
My father made in compassing the crown!
I Richard's body have interred new;
And on it have bestow'd more contrite tears
Than from it issued forced drops of blood: (IV. i.309–14)

今日だけは、おお主よ、
今日だけは父が王位篡奪の際に犯した

の中でこそ実を結ぶべきものであった。

6

宇宙論的体系において、王位の篡奪が神を頂点とする秩序への反逆と見なされたことはすでに述べた。たとえ暴君であろうと臣下に王を退位させる権利はなかった。当時大逆の罪は必ず神罰を招くものと信じられていた。

ボリングブルックがリチャード二世を王座から引きずりおろし、みずからヘンリー四世を名のった時（1399）、それはやがてバラ戦争の殺戮に至る混迷の時代の幕開けとなった。その時カーライルの主教は、祖国のたどる運命を鮮やかに予見することができた：

And if you crown him, let me prophesy:
The blood of English shall manure the ground,
And future ages groan for this foul act;
Peace shall go sleep with Turks and infidels,
And in this seat of peace tumultuous wars
Shall kin with kin and kind with kind confound;
Disorder, horror, fear and mutiny
Shall here inhabit, and this land be call'd
The field of Golgotha and dead men's skulls. (*Richard II*, IV. i. 136
—44)

彼に王冠をいただかせるというのなら、私の予言をお聞きください。
英国人の血は大地の肥やしとなり、
未来はこのいまわしい行為のためにうめき苦しむでしょう。
平和は去ってトルコ人や邪教徒のもとに眠り、
この安寧の地は騒然たる戦乱に明け暮れ、
骨肉相争い、同胞相滅ぼすことになりましょう。
混乱、恐慌、恐れ、暴動がこの地に

る者があれば、死をもって罰せられる旨
全軍に布告せよ。

これをコリオライの勝利は「おれ一人でやったのだ、Alone I did it.」(V. vi. 117) と豪語するコリオレイナスに比べるなら、その差異は歴然としている。名誉を私するのではなく、神をたたえ栄光を神に帰すべきであるという王の態度は、キリスト教的名誉観そのものの表明であるといえよう。その背後にあるのは、人間の持つ卓越はすべて天与のものであるとする信仰である。ではこのような名誉観が由来する背景には何があったのか。

アリストテレス的矜持を古代ローマの特徴の一つに数えるなら、宇宙の秩序の観念は英国の中世とルネッサンス期における、それに匹敵する一大特色であった。それはティリヤードも指摘するように、「この時代の真の支配的な観念の一つであり、おそらくこの時代の最も独自のものであった。」¹¹⁾キリスト教神学と異教哲学の混合になる教義は、M. M. リースが「宇宙論的体系」¹²⁾と呼ぶ「神の偉大な計画にかなう宇宙、すなわちすべてのものがその地位を保ち、空しく存在するものは何一つないという整然とした包括的な体系」¹³⁾を提供した。この宇宙を支配する根本原理が秩序である。宇宙では天球も、惑星も、地球もそれぞれの位階、順位、地位を保って一糸乱れぬ運行を営んでいる。秩序を欠けば安定も持続もなく、遂には宇宙そのものの崩壊を招くことになる。

整然とした秩序はまた被造物の中にも見られる。神を頂点とする存在の鎖の中で人間は天使と獣の中間に位置し、地上の創造物の中では最高の地位が与えられていた。そして秩序は人間の間にも厳存する。人は与えられた以上の地位を望むことは許されない。とりわけ人間の首位に立って神の職務を代行する王に対する謀反は、神の定めた秩序をゆるがし混乱をもたらす大逆の罪として厳しく批難された。

栄光を神に帰したヘンリー五世の敬虔も、この宇宙の秩序の観念と切り離しては考えられない。「全クリスチャン王の鑑、the mirror of all Christian kings」(II. Prologue. 6) とたたえられた、英国史劇中まれに見る深い信仰が王の資質による所大であるにしても、それはこの時代思潮

紀半ば英国に定着し、やがて中世英国社会に支配的な力をふるうようになる。

5

キリスト教信仰が普及する一方、ローマ的名誉観もなお脈々と受け継がれていた——中世英国の置かれたこうした状況の中で、その名誉観は必然的にローマ的、キリスト教的という二つの矛盾する要素を内包することになる。そしてキリスト教的要素こそ、古代ローマの名誉観と一線を画させるものであった。キリスト教的名誉観がどのようなものであるのか、これまでに例証したローマ的名誉観との相違に注目してみよう。

ヘンリー五世は英国史劇中第一の名君として衆望を一身に集めている。フランスに遠征した彼がアジンコートでの歴史的な勝利の報を知らされるや、すかさず神への賛美を口にする：

Mont. The day is yours.

K. Hen. Praised be God, and not our strength, for it! (*Henry V*,
IV. vii. 89–90)

モントジョイ 勝利は陛下のものです。

王 そのためにたたえられるべきは神であって、私の力ではない。

そればかりか更に王は神のご加護を忘れる不心得者のないように念を押す：

And be it death proclaimed through our host
To boast of this or take that praise from God
Which is his only. (IV. viii. 119–21)

神にのみ帰せられるべき今日の栄光を吹聴し、これを横取りしようとする

故に矜持ある人は、名誉と不名誉に関しそれぞれ適切に対応するのである。矜持ある人がかかわる対象が名誉であるのは、議論の余地なく明白である。名誉こそ偉大な人々がほかの何にもまして要求し、それに値するものだからである。⁸⁾

名誉心が人間の本性に由来する自然の欲求であるにしても、ここには当然のここのように名誉を強要する横柄さが鼻につく。従ってこのような矜持は、「人間の尊大さと自力本願を得々と誇ることなのだ」と論評するカーティス・ワトソンの批判も一理なしとしない。まことにアリストテレス的矜持に基づくこのような名誉観こそローマ的名誉観と呼ばれるべきもので、その現われる姿は異なるにしても、ローマ史劇の主人公たちに共通して認められる特性である。このローマ的名誉観がまた、中世英国にも引き継がれた様子はすでにホットスパーの場合に見た。

アリストテレス的矜持とは対照的に、謙遜を旨とし、神のめぐみの前にすべての人は平等であると説いたのはキリスト教であった。いわばローマ社会に対するアンチ・テーゼとして、歴代の皇帝の迫害にもかかわらずキリスト教は民衆の中に浸透して行った。そしてローマ的名誉観に対する批難の矢は、当然キリスト教の側から放たれた。古代キリスト教最大の神学者で、ローマ帝国に対する嫌悪の念を隠そうとしなかったアウグスティヌス（354－430）は、帝国のかかえる弱みと、その名誉観が秘める狙いをあばいて見せる：

それらの英雄たちは地の国——天上ではなく地上にある王国——に属していたので、彼らに課された義務はすべて祖国の安全を目的とするものであった。彼らは永遠の生命に属するのではなく、死者が去れば入れ替わってこれもまたやがて死ぬべき者がそのあとを継ぐという転変のうちに身を置いていた。栄光以外彼らが愛したものがほかに何かあっただろうか？栄光の故に、死後も自分たちを称賛する人々の口の端にのぼり、彼らは生きながらえることを欲したのだ。¹⁰⁾

アウグスティヌスがその神学的基礎の確立に心を砕いたキリスト教は7世

いずれ劣らぬつわものぶりを発揮した。ちなみに、この伝統的な死生観は後期ローマ人やチュートン人から、中世を経てルネッサンスに受け継がれていたのである。しかしながら古代ローマと中世英国という異質の時代が、アリストテレスの名誉観を共有しながらも、それぞれ独自の時代色をにじませることはなかったのか。この題目に移る前に、アリストテレスとは違った視点から論じるプラトンの名誉論を一瞥することにしよう。

4

プラトンは魂の果たす役割を三つに分類する。第一は「魂の中の、それによって評価し推論するところのもの」⁶⁾すなわち理性的部分であり、第二は「それによって恋し、飢え、渇き、そのほかの欲望をときめかし、そるもの」⁶⁾、すなわち非理性的な欲望的部分である。第三の働きはプラトンが「憤りを感じるもの、すなわち覇気の原理」⁶⁾と呼び、また「野心的部分、名誉を熱望するもの」⁷⁾と呼んだ機能である。

一人の人間にあっていずれの部分かにより、人間も「知恵を愛する人」、「利得を愛する人」、「勝利を愛する人」⁷⁾の三種類に分けられる。コリオレイナスとホットスパーの、功名心に駆られる激越な気性を思い浮かべるなら、彼らが名誉を熱望する「勝利を愛する人」であるのは明らかだ。名誉の現象面を取り上げたアリストテレスに対し、プラトンは人間性の観点に立ってこれを考察したのである。

ローマ史劇の主人公たちを動かすローマ的名誉観は、人間のこの本能的な野心に深くかかわっている。古代ローマ人はおのれの卓越（徳）を誇り、そのすぐれた卓越に対する世間の認知と報償、つまり名誉を求めるのを当然のことと考えた。アリストテレスのくだす「矜持ある人」の定義は、古代ローマ人の抱いた自負がどのようなものであったかを垣間見せてくれる。「矜持ある人は大きいもの、とりわけ最大のものを要求し、それに値する人である。」⁸⁾矜持ある人の関心は、最大のものにしか向かわない。そして「名誉は」とアリストテレスは言う、「明らかに外面的善の最大のものである。」

武人の鑑の誉れ

をほしいままにしている。(下点筆者)

一人は「ケイトーが理想とする武人」と称揚され、今一人は「武人の鑑」と絶賛される。両者は共にいまわの際まで、おのが名誉に固執する。刺殺される寸前、コリオレイナスはコリオライの勝利が自分一人の働きによるものだと高言し、ホットスパーは王子ハリーに敗れて失うはかない命よりも、そのために奪われる武名を惜しむのである。名誉に対する執着に、古代ローマと中世英国の武将の間に、いささかの遜色もないように思われる。彼らがこれほどまでに拘泥する名誉とは何であったのか。

3

「名誉は徳に対する報償であり、よき人々にわれわれが贈る捧げ物である」³⁾とは、名誉に関するアリストテレスの古典的定義であり、中世並びにルネッサンス英国にも引き継がれた最も基本的な見解である。現に英国で初めて本格的にこの主題を取り上げた『名誉論』の著者ロバート・アシュリー(1565-1641)は言う、「したがって名誉はおのずから輝き出る徳の証明であり、よき人々の判断によって人に与えられる。」⁴⁾名誉を徳に結びつける基本的な関係の中に、アリストテレスの影響を見ることができる。

ここで留意すべきは、古代ローマで勇敢が最高の徳とみなされていたという事情である。それは徳を表わすのに、勇敢を意味するウィルトゥス(virtus)なる言葉で代用したという事実が端的に物語っている。軍国ローマにおいて武功はそのまま有徳の行為として喝采を浴び、名誉の授受につながったのである。そうであるなら、名誉を求める武将たちが戦場での勇猛果敢を競ったのも当然といわなければならない。

「16世紀に至るまで、名誉はアリストテレスが与えた意味しか持たないようであった」⁵⁾、とルース・ケルソーは述べる。なるほどコリオレイナスもホットスパーも、武勲という名誉にかける執念において、また「卑劣な生よりも名誉ある死を選ぶ」という伝統的な武人の死生観において、

Were not so rich a jewel. Thou wast a soldier
 Even to Cato's wish, not fierce and terrible
 Only in strokes; but, with thy grim looks and
 The thunder-like percussion of thy sounds,
 Thou madest thine enemies shake, as if the world
 Were feverous and did tremble. (I. iv. 54-61)

マーシャス、君は一人敵中に取り残されてしまったのか。
 等身大ほどの無きずのルビーも
 君ほどの価値はあるまい。君はケイトーが理想とする武人だった。しの
 ぎを削る激戦に
 勇猛果敢であつたばかりではない。君の精悍な面構えと
 雷鳴のようにとどろく大音声で、
 まるで世界が熱病にかかつて身ぶるいするかのよう、
 敵をふるえあがらせたのだ。(下点筆者)

同様の賛辞をホットスパーも、彼が反旗をひるがえす当のヘンリー四世か
 ら受ける：

What never-dying honour hath he got
 Against renowned Douglas! whose high deeds,
 Whose hot incursions and great name in arms
 holds from all soldiers chief majority
 And military title capital
 Through all the kingdoms that acknowledge Christ: (III. ii. 106-
 111)

名だたるダグラスを向こうにまわして、
 何という不滅の栄誉を彼はかち得たのだろう！
 そのかくかくたる武勲、果敢な進撃、轟く勇名は
 全キリスト教国に冠絶し、

みじめな生よりも名誉の死を願ひ、
 祖国がわが身よりも大事であると考える者がいるなら、
 一人でもいるなら、いや同じ志を持つ者なら何名でもよい、
 このように槍を振って決意を表わし、
 マーシャスについてこい。(下点筆者)

「みじめな生よりも名誉の死 (brave death)」を願うことにかけて、ホットスパーもコリオレイナスに後れを取る者ではない、シュルーズベリの決戦を前にして彼は、正々堂々と王の軍隊に立ち向かう覚悟を披瀝する：

O gentlemen, the time of life is short!
 To spend that shortness basely were too long,
 If life did ride upon a dial's point,
 Still ending at the arrival of an hour.
 An if we live, we live to tread on kings;
 If die, brave death, when princes die with us! (*I Henry IV*, V. ii.
 82-7)

ああ、諸君、人の一生は短いのだ！
 たとえ人生が時計の針の先に乗っかっていて、
 針が一巡りすればそれでこの世とおさらばということであっても、
 卑劣な生を送るなら、その短い一生も長すぎよう。
 生きるなら、吾々は王を踏みつぶして生きるのだ、
 死ぬのなら、王の一族を道づれに名誉の死を遂げよう！(下点筆者)

彼らの抜群の戦功には、敵味方の区別なく絶賛が浴びせられる。敗走する敵を追って一人コリオレイナスがヴォルサイ軍の城内へ消えたという報告を受けた將軍ラーシャスは、哀惜の声を上げる：

Thou art left, Marcius:
 A carbuncle entire, as big as thou art,

史劇の武将たちと比べ、どのような特異性を持つのか。主人公たちに共通する内面的要素をより鮮明に浮き彫りにするために、ローマ史劇と英国史劇の武将たちの対比を試みることにしたい。

2

まずローマ史劇第一の勇士であるコリオレイナスと、彼に比肩する英国史劇の猛将ホットスパーを対置することから始めよう。古代ローマと中世英国という時代背景はもとより、彼ら個人の置かれた状況にも大きな相違がある。コリオレイナスの場合貴族と平民の対立が内にあり、外では隣国ヴォルサイとの間に侵攻が繰り返されていた。一方英国ではホットスパーの父ノサンバランド伯に率いられたパーシー一族と、ヘンリー四世の反目があらわである。ヘンリー四世の即位に力を貸したものの、その後王に疎んじられたパーシー一族は、王の背信をなじり遂に反乱の軍を起こす。ホットスパーは侍大将としてその先陣を承るのである。

陰性と陽性、寡黙と冗舌といったふうにコリオレイナスとホットスパーの気質は著しい対照をなすのであるが、戦場での活躍は一様に鬼神をもひしぐ。決死隊をつのって、ヴォルサイ陣への突撃を企てるコリオレイナスは兵士たちに呼びかける：

If any fear

Lesser his person than an ill report;
If any think brave death outweighs bad life
And that his country's dearer than himself;
Let him alone, or so many so minded,
Wave thus, to express his disposition,
And follow Marcius. (I. vi. 69—75)²⁾

命を失うよりも
汚名を蒙るのを恐れ、

ローマ史劇と英国史劇の武将たち —— 彼らに見る名誉観をめぐって ——

吉 富 栄

1

モーリス・チャーニは、『ジュリアス・シーザー』、『アントニーとクレオパトラ』、『コリオレイナス』の三作がローマ史劇と呼ばれる一つのグループを形成する論拠として三つの要因を挙げる。¹⁾

- (1) エリザベス朝の舞台における「ローマ」の衣装の使用,
- (2) 自刃が精神的な勇気と、気高さを表す行為であるとする、ローマ的賞賛,
- (3) ノース訳のプルタークを共通の資料に用いていること。

これらはいずれもローマ史劇の外面的特質にほかならないが、チャーニとは異なる視点に立って、登場人物たちを連結する共通の内面的要素は見いだせないものか。私は主人公たちの内面を模索して、ローマ的名誉観とも呼ばれるべき、一つの共通する概念が彼らの行動の規範となっているのに気づいた。

ブルータスの場合、私的倫理と公的倫理との選択に苦悶する彼は、友人シーザーの殺害を悪と見る立場を捨て、公的倫理すなわちローマ共和政擁護の名誉を選択する。またアントニーは武勲を誇るローマ的名誉心と、クレオパトラに象徴されるエジプト的快楽との葛藤に苦しむ。結局愛と名誉の相剋を止揚した彼は、クレオパトラの身の上を案じつつローマの武人にふさわしい自害を遂げる。一方コリオレイナスの苦悩は、母親の勧める世間的名誉と彼が固執する私的名誉との隔絶により引き起こされる。彼にとって名誉とは位階や名声をいうのではなく、ひたすら自己に忠実であること、己れを偽らないことを措いてはなかった。けれどもこのような名誉観が、早晚社会の壁に突き当たって自滅するであろうことは明らかである。

主人公たちの行動の背後にあるこうしたローマ的名誉観は、例えば英国